

公大 そよかぜ

血液内科・造血細胞移植科

新任部長の ご挨拶

血液内科・造血細胞移植科

ナカマエ ヒロシサ
中前 博久



本年7月に血液内科・造血細胞移植科部長を拝命しました
なかまえ ひろし
中前 博久と申します。

ています。

さらに、新薬の治験や先進医療の研究にも力を入れています。

当科は造血幹細胞移植推進拠点病院として、血縁ドナーだけでなく骨髄バンクや臍帯血さいたいけつを含む非血縁ドナーからの移植も積極的に行っています。移植後

治療内容は丁寧に説明させていただき、患者さんと一緒に決めていき、安全で質の高い医療の提供を行っていきたいと考えております。

※¹ シクロホスファミド大量療法を用いた血縁HLA半合致移植（ハプロ移植）も多数実施しております。

※¹ シクロホスファミド大量療法
投薬する事で核酸の合成を妨害し、がん細胞を死滅させる方法

また、悪性リンパ腫に対する、

※² キメラ抗原受容体（CAR）T細胞療法
患者さん自身の免疫細胞の1つであるT細胞を取り出し、腫瘍細胞を狙い撃ちできるように遺伝子改変して体内に戻す治療法

※² キメラ抗原受容体（CAR）T細胞療法や二重特異性抗体などの新しい免疫治療も導入し

※³ 二重特異性抗体
腫瘍細胞と免疫細胞の両方にくっつき、免疫細胞を腫瘍のそばに呼び寄せて攻撃させる薬

栄養部

旬の食材を使ったレシピ



材料
(4~5人分)

- さつまいも …… 中1本(200g)
- ほうれん草 …… 1/2束
- 和え衣
- 木綿豆腐 …… 150g
- すりごま …… 大さじ1杯
- 味噌 …… 大さじ1杯
- だし醤油 …… 大さじ1/2杯
- 塩 …… ひとつまみ

栄養満点！
秋を感じる満足な一品

さつまいもの白和え

- 1 さつまいもは1cm角に切り、水にさらした後、湿らせたペーパータオルとラップで包み、電子レンジ600Wで約3分加熱する。
- 2 ほうれん草は2cmの長さに切り、茹でて水気を絞る。
- 3 豆腐を湿らせたペーパータオルに包み、電子レンジ600Wで約3分加熱し、水気を絞る。
- 4 ボールに豆腐、すりごま、調味料を加えて、つぶしながら混ぜる。
- 5 最後に 1 2 を混ぜ合わせ、小鉢に盛る。

調理のポイント

- なめらかな舌触りを出したい方は、豆腐をすり鉢やフードプロセッサーでつぶしたり、ジッパーに入れて手でつぶすのも簡単でおすすめです。さつまいももお好みの柔らかさに調整してみてください。
- さつまいもの甘さに合わせて砂糖を足して調整してみてください。

「第3の狭心症」をご存知ですか？

循環器内科

オオツカ ケンイチロウ
大塚 憲一郎

狭心症といえば、動脈硬化による冠動脈^{きょうさく}狭窄を伴う「労作性^{ろうさせい}狭心症（第1の狭心症）」や、冠動脈の攣縮^{れんしゆく}による「冠攣縮性狭心症（第2の狭心症）」が知られています。さらに近年注目されているのが「第3の狭心症」、すなわち微小血管狭心症です。

これは冠動脈造影では明らかな狭窄を認めないにもかかわらず、冠微小血管の構造や機能異常により胸痛を呈する病態で、INOCA (Ischemia with Nonobstructive Coronary Artery

disease)として分類されます。特に閉経後女性に多く、硝酸薬が効かないことも多いため見逃されがちです。

当科では、カテーテル検査による冠攣縮誘発試験やプレッシャーワイヤーを用いた微小循環指標測定による機能的評価も行っており、微小血管狭心症の疑いのある患者さんへの包括的診療が可能です。

難治性胸痛や非典型例に遭遇された際は、ぜひご相談ください。



循環器内科スタッフ

高齢者のてんかん

その症状も ひょっとしたら てんかん!?

脳神経内科

ハセガワ イツキ
長谷川 樹

皆さま、てんかんという病名についてどのようなイメージをお持ちでしょうか。救急外来で搬送されてくるような、意識を失って全身をガクガクと振るわせる「けいれん」を想像される方も多いのではないのでしょうか。

実は、高齢のてんかん患者さんはほとんどが「けいれん」以外の症状が中心で、約4割がけいれんを伴わず、意識がぼんやりする発作型と言われています。中にはけいれんを一度も起こさないような方もいらっしゃいます。

高齢者に多い側頭葉てんかんでは、お腹の不快感や既視感（デジャヴ）で始まり、呼びかけに反応がなくなり、口がもぐもぐ動いたり手が勝手に動くような自動症がみられたりします。

また、けいれんが無くとも脳の中で電気の異常が続く状態を、

「非けいれん性てんかん重積」と呼び、中には認知症と間違われて対応されている場合もあります。

てんかん患者さんを適切な検査、治療に結びつけるためにも、まずは一度てんかんを疑ってみてください。



当院では、
入院でのビデオ脳波
モニタリングも
可能です。

患者総合支援センターが

リニューアルオープン！

患者総合支援センター

センター長

スナミ キシコ
角南 貴司子

当院では、地域医療連携を推進し、患者さんの療養生活の支援を円滑にすすめるために、2011年より当センターを設置しております。

このたび、2025年7月22日に当センターがリニューアルオープンし、より快適で安心できる環境へと生まれ変わりました。



患者さんの待合ロビー



完全個室の面談室

今回のリニューアルでは、入退院支援センターを移設し、完全個室の面談室を8室設けました。入院前の不安やご相談を、安心してお話しいただけるよう、プライバシーに配慮した落ち着いた空間になっています。

また、医療相談や地域医療連携、退院支援、国際診療支援、ゲノム医療など、これまで別々であった職員の事務室を一か所に集約しました。多職種連携がよりスムーズになり、患者さんへの支援体制がさらに充実しました。

これからも、患者さん・地域の先生方とともに、安心して医療を受けていただける環境づくりに努めてまいります。

看護部シリーズ

急性・重症患者看護 専門看護師のご紹介

救命救急センター

アベ ミサコ
師長 阿部 美佐子



専門看護師による研修風景

突然の発症・受傷、あるいは病状の急激な悪化により生命が危機状態に陥った患者さんは、救命、全身状態の安定に向けた医療を受けます。

専門看護師は、人工心肺や人工呼吸器などの生命維持装置、循環動態を司る薬剤の投与など、治療に対する患者さんの反応や状態、各種検査データを細かく観察・分析して、看護ケアの方法や内容を調整しています。また、患者さんが、意識障害などで自らの苦痛や意思を表すことが困難な状況でも、なんとかして汲み取る方法を探り、ご家

族、医療チームと共に患者さんにとっての最善を見つけ出し実現を目指します。

これらにより、「患者さんご家族がこれまでの『生活』に戻る」を目標に、重症治療に伴う合併症を限りなく少なくするよう努めます。

さらに、患者さんより近くで関わる病院看護師に対して、状態悪化予測・対応に向けた研修や倫理教育を行っています。

あらゆる看護師が、それぞれの場・状況で、患者さん一人ひとりに沿った看護を行えるよう、質の向上を目指しています。

「がんを光らせて治す」時代がやってきた！

インザワ タケアキ

肝胆膵外科 石沢 武彰



手術には光が必要です。……当たり前ですよね、暗闇では安全な手術はできません(ブラック・ジャック以外は)。明るい手術灯がない時代の手術室は、温室のようなガラス天井で病院の中で一番明るい場所に設置されていたようです。

当科が取り組んでいる最新の**蛍光ガイド手術**では、がん組織や肝臓の区域の境界、血液の流れなど、「**肉眼では見にくいもの、見えないもの**」を明瞭に「**光らせて**」、今までよりも安全・確実な治療を提供しています。

この**蛍光ガイド手術**には、さまざまな用途がありますが、今回は「**肝がんの蛍光イメージング**」を紹介します。2007年のある日、手術の助手をしていた私は、「肝臓がん」が自ら**蛍光**を発していることに気づきました。何故がんが光っているのか、見当もつきませんでした。

しかし、落ち着いて考えてみると、当時の病院では肝臓の手術を受ける患者さんは全員、インドシアニンググリーン(ICG)という試薬を注射する肝機能

の検査を、手術の数日前に受けていました。そして、このICGに「近赤外光(TVなどのリモコンで使われる、目に見えない波長の光)」が当たると**蛍光**を発する」という性質があるのです。

私は片っ端から肝がんの切除標本に近赤外光を照射する実験を行い、ついに「手術前に投与したICGが肝がんの内部や周囲に蓄積するので、光を当てると**蛍光**を発する」という事実を突き留めました。

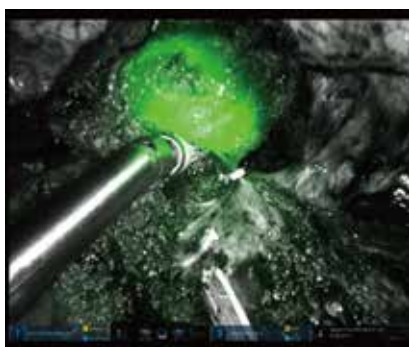
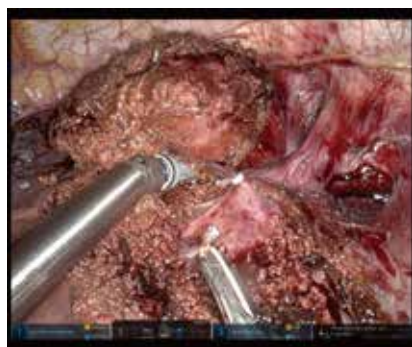
そして、これを肝臓がんの手術ナビゲーションに応用したのです(ロボット支援肝切除での応用を下図に示します)。

その後20年近い時を経て、この方法は世界中で広く用いられるようになりました。肝がんを光らせると手術時間が短縮し、再発も少なくなることを示す論文も報告されています。肝臓以外のがんを光らせる新しい薬剤も米国で承認されており、遠からず日本でも使用できるようになるでしょう。

当科では、難治性として知られる肝胆膵がんの根治を目指して、腫瘍に集積

して光を発するだけでなく、局所で強い抗がん作用を発揮する新しい**蛍光プローブ**の開発に積極的に取り組んでいます。

さらに詳しい情報は、拙書「手術はすごい」(講談社ブルーバックス)をご参照ください。



ICGで「光る」肝臓がん(左は通常のカラー像、右は蛍光像)

